

氣賀健三先生の自由主義的哲学と業績

法政大学教授 林 直嗣

『語り継ごう！氣賀哲学』氣賀健三先生を偲ぶ会（加藤寛）編、2002年11月 pp.49-51

私は氣賀健三先生の最後のゼミ生の一人であり、学部と大学院修士課程を通じ3年間先生の授業を取らせていただいた。学部の時は1972年度から73年度まで氣賀健三先生のゼミで計画経済論、経済政策論、ピグウの厚生経済学を学び、先生が定年になられた1974年度から修士課程では加藤寛先生に指導教授として師事して、氣賀先生の経済政策特殊研究でハイエクの英書『Law, Registration and Liberty（法と立法と自由）』を研究した。私は博士課程からは貨幣・金融論や理論経済学に専攻を移して福岡正夫先生や田村茂先生に師事し、正統派の新古典派経済学の伝統を汲みつつも、氣賀健三先生や加藤寛先生の自由主義的な経済政策論の教えは今日まで私の一部となって生きている。

とりわけ大きな影響は、人間の尊厳と自由を重視する哲学的・思想的な教えであり、氣賀先生の薫陶により自由主義の大切さを次第に理解するようになった。その契機となったのが、氣賀先生の『社会的進歩の原理』（塙書房、1956）である。本書で先生は、社会科学における価値判断論争を総括し、没価値論（Wertfreiheit）を唱えるマックス・ヴェーバーも階級史観に基づくマルクス主義も共に排された。そして社会的に支持される正当な理想を追求するためには、客観的・普遍的に妥当する価値を根底にもつべきであると言われ、その哲学的・思想的根拠をイギリスの自由主義思想に求められた。副題が「経済政策原理の社会哲学的研究」とあるように、先生の経済政策論は自由主義の哲学と思想により根拠づけられている。その後先生の自由主義研究は、大陸自由主義とりわけミーゼスやハイエクなどオーストリア学派の自由主義思想の研究にまで進まれた。大陸自由主義の特徴は人間としての個人の尊厳や人権を重視し、優れて個人主義的な性格をもち、全体主義思想に強く反対するところにある。1986年から87年にかけて先生は晩年の力を振り絞り、ハイエク全集の『自由の条件』全3巻（春秋社）を翻訳された。同じハイエク全集で、加藤寛先生監修の元に細野助博先生と林直嗣は『利潤、利子および投資』を翻訳し、協力させていただいた。

こうした自由主義哲学に立脚し、氣賀先生は『ソビエト経済の研究』（日本評論社、1960）、『共産主義の経済 上・下』（塙新書、1967、1969）などでソヴィエト計画経済体制の非合理性や非経済性を強く批判し、ミーゼスなどと同様にその崩壊の必然性を早くから示唆されていた。そして『正しきことは正しきこと』（PHP研究所、1989）でゴルバチョフ改革でもソ連共産主義が行き詰まっていることを鋭く指摘された直後、東欧の社会主義諸国が崩壊し、続いてソ連も1991年には崩壊して、自由主義経済への道を歩み始めることになった。

氣賀先生のもう一つの学問的業績分野は言うまでもなく、「成長、安定、平等」を3大政策目標とするピグウ厚生経済学を原点とする自由主義的な経済政策論である。氣賀健三先生・加藤寛先生・小松雅雄先生共著の『経済政策論』（世界書院、1965）は私が最初に政策

論を学んだ懐かしい教科書である。加藤寛先生がよく言われるように「理念なき経済学は盲目であり、実践なき経済学は空虚である」が、氣賀経済学は独立自尊の自由主義を理念とし実践を伴う経済学である。正当な理念と哲学、透徹した洞察力、鋭い批判力、豊かな現実感覚、的確な政策指針、そして無邪気な笑顔、氣賀先生の教えと思い出は今でも生き続けている。90年間本当にご苦勞様でした。安らかなご冥福を祈る次第です。